

## 2020年度 事業報告

施設名 東北沢つどいの家

### 1 利用状況

事業種別： 生活介護 定員 7人 利用者数 11人

#### (1) 障害支援区分

区分6	10人	区分5	1人	区分4	0人
区分3以下	0人	計		11人	

#### (2) 障害の程度

		身体障害者手帳				計
		1級	2級	3~7級	なし	
愛 の 手 帳	1度					0人
	2度	3人				3人
	3~4度					0人
	なし	7人	1人			8人
計		10人	1人	0人	0人	11人

#### (3) 年齢、性別

10代以下	1人	40代	2人
20代	3人	50代	1人
30代	2人	60代以上	2人
計		11人	

男性	6人
女性	5人
計	11人

## 2 事業実施状況

### (1) 活動・支援の内容

- 開所日数 243 日で延べ利用者 1562 人、一日平均 6.3 人の利用、平均利用率 91.8% だった。4 月より 1 名利用者が増えた事で 2019 年度と比べ、一日平均 0.8 人増、利用率は 13% 増となった。
- 新型コロナ感染症拡大に伴う 4 月からの緊急事態宣言下では、施設内での密集を避けるために男女別々で隔日の通所とするなど、感染対策をご家庭の協力を得ながら行った事で利用者・職員ともに感染者を出さずに事業を継続できた。(男女別通所 4/14~5/30)
- 今年度は利用者や主たる介護者の高齢化により入院を伴う長期欠席もみられるなど、いわゆる 8050 問題が顕著に出てきた。また、コロナ禍の影響により精神的に不安定な状況を抱えている利用者も散見され、これまで以上に精神面を含めた支援が行えるように個別の話し合いの場を多く設けた。
- 訪問支援を行ってきた 2 名の利用者に対しては、感染予防もあり訪問による支援を控えた。また、高齢の利用者 2 名も利用の自粛で一年間通所はなかった。ただ、月に 1 回程度、電話やメールで状況を確認するなど、本人や家族が孤立しないように支援を続けた。
- 外出を伴う行事やボランティアの協力が必要なイベントは、感染防止の観点から全て中止とした。かわりに室内で行うミニイベントを例年より多く企画し、サービスの維持に繋がるよう工夫した。

#### ※行事等

- |              |                   |
|--------------|-------------------|
| ・4月 入所式 (5日) | ・7月 つどいのわ発送 (21日) |
| ・5月          | ・8月 暑気払い (1日)     |
| ・6月          | 東/玉リモート交流会 (18日)  |

- ・9月 所内レクリエーション (15日)
- ・10月 自衛消防訓練 (9日)、室内レク (17日)  
利用者健康診断、インフルエンザ予防接種
- ・11月 障害者アート展見学 (10、12日)
- ・12月 年賀状書き (10、15日)、忘年会 (28日)
- ・1月 冬休み (～3日)、新年会 (26日)
- ・2月 東／玉リモート交流会 (26日)
- ・3月 防災教室 (11日)、納会 (30日)

### ※一日のスケジュール

8:45	職員ミーティング
9:45	来所時間
10:00	朝の準備・朝のミーティング
10:15	午前の活動
11:30	昼食・昼休み
14:00	午後の活動
15:15	帰りのミーティング・帰り支度
15:50	退所時間
16:20	職員会議 ほか

### ※日中活動内容

・ グルメ	4・5月の緊急事態宣言もあり、7月から感染防止策を徹底して再開した。 3か月毎に利用者と相談して「寄付された食材を使用した料理」「スープ・汁物」「○○に効く料理」というテーマでメニューを考える。調理の作業を通して「手の緊張を抜く」「切る」「対象物を見ながら手を動かす」といった随意的動作に繋がった他、作業を通して利用者同志の連携や役割分担もみられた。
・ グルメ振返り	グルメで使用した食材を、各々の利用者が調理担当したものを中心に6大栄養素に分類した他、各栄養が体の中でどのように役立つかを説明するなど、作るだけでなく栄養や食材に関する知識を深めた。
・ プール	利用者の身体機能維持には、浮力を利用した水中での運動は大きな役割を果たしているが、利用者と職員だけでなく、ボランティアの協力が必要な活動のため、現在の状況下では感染防止対策を徹底するのは困難と判断し、安全を最優先して活動の実施を見合わせた。再開できる見込みはたっていないが、機能低下に繋がらないよう所内での活動では意識して身体を動かせるように支援した。
・ セルフ	自分の時間の使い方を考える事をテーマに行っている活動。自分のペースで予定を組みながら、グルメ(調理実習)のメニュー考案・レザークラフトの作業補てん・発行紙の文章作成・各利用者個別の取り組み等を行う。定期的にケース担当と面談をする利用者はこれまでもいたが、コロナ禍での精神的な不安を吐露する機会として、職員との面談を申し出る利用者が例年より多くいた。
・ ミーティング	月間スケジュールや行事の内容確認・振り返り等を全員で話し合う。「自分の考えた事をしっかりと伝える」場面としての役割を担っている活動で、進行も議題の提案も利用者が行っている。 新しく加わった利用者に対して、職員からだけでなく、先輩からも話し合いの内容を説明する場面があった。
・ レザークラフト+α	コロナ禍でイベントなどが中止となり、製作意欲がやや落ちた人もいたが、逆にゆっくり時間をかけて作業に取り組む様子も見られた。 新入利用者には作業の工程を覚えてもらえるように、1つの製品を最初から最後まで担当して製作するように支援した事で少しずつ作業に慣れながら、やりやすい作業を見つける事ができた。

<ul style="list-style-type: none"> <li>美術表現</li> </ul>	<p>季節を感じられるものをモチーフとし、なるべく実物をじっくり見ながら、色の三原色を基本に不透明水彩等の絵の具を使って絵画を制作した。</p> <p>今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大の関係で美術講師が来所できず、利用者個々の筆遣いや色彩感覚を活かした作品を創りあげていく事が難しかった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>サークル</li> </ul>	<p>考える力をつける文科系と、楽しみながら身体を動かす体育系で活動を行う。しりとり、カードゲーム、早口言葉、ボウリング、風船バレー等を実施。毎回ルール等を工夫して全員が主体的に参加できるよう支援した事で、利用者の理解力や思考を発見する機会にもなった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>訓練 (PT)</li> </ul>	<p>PT の専門的指導を受けながら各利用者の身体の取り組みを行った年齢を重ねることで腕の拘縮や側弯症が著しく進行している利用者は腹臥位保持装置を使用した姿勢が機能維持に良いと助言を受け、取り組む時間を増やした。</p> <p>利用者から直接PT に身体の状況を伝えられるよう支援し、セルフ活動での自主的な取り組みにも繋げる事ができた。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>けんこう</li> </ul>	<p>健康に関する勉強を行った。今年度はコロナウィルスの感染拡大に伴い、ウィルスとストレス・免疫力に関する知識を重点的に取り上げた。クイズや質問を織り交ぜながら利用者の日常体験と関連付けて話を進めた事で、理解が深まった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>美化</li> </ul>	<p>普段使っている場所を数名ずつ担当になり、掃除機かけやマット拭き、洗面台・便器磨き等を行なった。利用者一人ひとりに合わせたテーマを持ちながら作業をした事で、単なる清掃活動ではなく意識的に身体を動かす機会にもなった。</p>
<ul style="list-style-type: none"> <li>カラオケ</li> </ul>	<p>感染症対策を充分に行いながら、心肺機能の維持を楽しく行うことを目的に利用者から希望する曲を選んでもらい、大きな声で歌う。リズムをとったり、応援したり、自分が唄う以外も積極的に活動にかかわる場面が見られた。</p>

## (2) 地域交流

<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティアの受け入れや福祉体験教室などが行われず、積極的な地域交流はなかった。</li> <li>例年参加していた地域のイベントがほとんど中止となったが、感染状況を考慮しながら参加ができるものを探して施設のPR と自主生産品の販売を行った。(11月：烏山コミュニティまつり)</li> <li>恒例行事である「つどいの家まつり」を施設開放として続けてきたが、感染症の状況を考慮して中止した。</li> </ul>
--

## (3) 家族、関係機関との連携等

<ul style="list-style-type: none"> <li>例年は年3回程度保護者会を開催していたが、新型ウィルスの感染拡大により全て中止。その分、連絡事項の確認などはこれまで以上に丁寧に行う事を心掛け、連絡帳や電話などを通じて、日頃からのコミュニケーションを大事にした。</li> <li>4月からの緊急事態宣言下では、感染症への不安から利用を自粛する方もいたが、休みの間も電話で話をするなど、利用者や保護者への負担軽減に努めた。</li> <li>コロナ禍で、いつも以上にストレスを抱えている利用者が散見され、全体的に精神面への支援を見直すなかで、ご本人やご家庭の意向をじっくりと聞くように心掛けた。区はもちろん、ヘルパー派遣事業所や相談支援事業所とも情報を共有しながら支援をした。</li> </ul>
---

## (4) ボランティアや実習生の受入れ

<ul style="list-style-type: none"> <li>行事やプールの活動が行えずにボランティアへの協力をお願いする機会が少なくなった。福祉体験実習も実施されず、外部の人間が関わる場面がほとんど無い一年となった。今後、ボランティアや実習生を安心して受け入れていけるように、どのような方策が可能か検討している。</li> </ul>
--

## (5) 危機管理

- ・ 新型コロナ感染症拡大への感染防止が、全ての活動やサービスにおける重点となっていた。その中で、「感染防止」「施設開所の継続」を念頭に、嘱託医と看護師の医療スタッフにアドバイスを受けながら、毎日の消毒や換気などその時々で最善と思われる様々な対策を講じた。
- ・ 防災では、10月に自衛消防訓練、3月に防災教室を実施している。特に3月の防災教室では、東日本大震災からちょうど10年という事もあり、当時を振り返りながら実際に災害に直面した時の確認を行った。利用者からも当時の具体的な話が多く、対策へのイメージが掴み易かった。

## (6) 職員研修の実施

- ・ 外部研修は、多くがリモートや映像配信などでの開催となったために、例年よりも参加しやすい環境だった。ただ、研修のお知らせなどを回覧しても、積極的に参加できる研修を見つけて申し込む職員と、そうでない職員と格差が大きく表れた。
- ・ 事業所内の内部研修は、理事長と副理事長を招いて、利用者支援の在り方について常勤職員で意見交換を行った。
- ・ 法人の全体研修や新人研修は、感染状況を考慮しながらリモートなどを駆使して行った。

## (7) その他（苦情・事故等）

- ・ ヒヤリハット（計16件 給食発注ミス、服薬の確認ミス ほか）  
OJTの一環として記載するようになってきたが、積極的・自発的な記載はまだ少ない。
- ・ 事故（計8件 介助中の転倒、服薬の忘れ、施錠忘れ ほか）  
軽微な事故を見逃さずに報告した結果だと捉えている。報告を共有する事で重大事故に繋がらないように努めた。

## 3 重点課題と取り組み・成果

2020年度は以下を重点課題として挙げ、取り組んだ。

### ① 新しい人間関係の構築と支援

- 新しく加わった利用者と既存のメンバーの双方が円滑につどいの家の活動に取り組むことができるように、日々のコミュニケーションを丁寧に行い良好な関係性を築くために、細かな説明をしながら支援を行うように心掛けていたが、新年度早々に緊急事態宣言となり、全ての利用者に対してこれまで通りの支援方法を見直す必要に駆られた。保護者と直接会って話をする機会が極端に限られてしまった分、より丁寧な説明と対応を取るよう意識して支援をおこなった。

### ② 40周年に向けての準備

- 事業開始から40周年を迎えるにあたり、これまでの軌跡を記録としてまとめいく事を運営会議等で了承を得、法人全体での企画として取り組む事となったが、感染症への対応に重点が置かれてしまったために、具体的な進捗はない。

### ③ 活動や会議のマニュアル化と記録の整備

- 現在の職員体制でスムーズに業務を行えるように、これまでの業務内容の見直しやマニュアルを整備し、業務の効率化と可視化を図ることを目標としていたが、感染予防策など新たな業務が大量に発生したために日常業務をこなすことで精一杯となってしまう、記録の整備は少しずつ進んでいるものの、活動や支援のマニュアル化には至らなかった。